慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

慶應 2部門優勝。3部門準優勝

第67回東医体

第67回東日本医科学生総合体育大会（東医体）夏季部門が開催された。医学部体育会の多くの部活が、東医体に向けて厳しい練習を重ねてきた。その成果を発揮すべく、各地で熱戦が繰り広げられた。

東医体は、各競技の順位に応じたポイントが大学に付与され、その合計点で総合優勝校を争うシステムとなっている。今大会において、ゴルフ男子部とハンドボール部が優勝、ヨット男子部、水泳男子部、空手道男子部の3部門で準優勝となった。さらに、弓道部、硬式庭球男子部の3部門が第3位となった。そのほかの多くの部門でポイント獲得を成し遂げた。

今月号では、好成績を収めた部活の主将に行ったインタビューをお届けする。選手たちの熱く淡くほろ苦いひと夏の1ページを読者の皆様にお伝えすることができれば幸いである。

（5年　伊庭知里）

部活	性別	1位	2位	3位
弓道		東北大学	秋田大学	慶應義塾大学
ラグビー		信州大学	弘前大学	順天堂大学
ヨット		日本医科大学	慶應義塾大学	千葉大学
卓球	男子	東北大学	信州大学	東京大学
	女子	旭川医科大学	順天堂大学	自治医科大学
硬式野球		信州大学	千葉大学	東京医科大学
硬式庭球	男子	獨協医科大学	東京医科歯科大学	慶應義塾大学
	女子	日本大学	日本医科大学	福島県立医科大学
バスケットボール	男子	新潟大学	東京医科大学	帝京大学
	女子	信州大学	日本医科大学	順天堂大学
水泳	男子	自治医科大学	慶應義塾大学	日本医科大学
	女子	信州大学	福島県立医科大学	日本医科大学
剣道	男子	福島県立大学	東海大学	千葉大学 秋田大学
	女子	自治医科大学	国際医療福祉大学	筑波大学 東京医科大学
柔道	男子	東海大学	防衛医科大学	自治医科大学 杏林大学
	女子	自治医科大学	杏林大学	旭川医科大学
ゴルフ	男子	慶應義塾大学	獨協医科大学	埼玉医科大学
	女子	東京慈恵会医科大学	聖マリアンナ医科大学	獨協医科大学
ソフトテニス	男子	福島県立医科大学	群馬大学	信州大学
	女子	信州大学	福島県立医科大学	秋田大学
サッカー		山形大学	筑波大学	福島県立医科大学
ハンドボール		慶應義塾大学	筑波大学	旭川大学
陸上	男子	筑波大学	群馬大学	東北大学
	女子	北里大学	山形大学	筑波大学
端艇		自治医科大学	北海道大学	福島県立医科大学
空手	男子	埼玉医科大学	慶應義塾大学	自治医科大学
	女子	自治医科大学	弘前大学	新潟大学
馬術		山梨大学	東京慈恵会医科大学	東京医科大学
バドミントン	男子	秋田大学	札幌医科大学	筑波大学
	女子	自治医科大学	信州大学	岩手医科大学
バレーボール	男子	信州大学	秋田大学	山形大学
	女子	群馬大学	埼玉医科大学	自治医科大学

ゴルフ部　男子総合優勝

去る8月3日～7日、那須烏山の風月カントリークラブに於いて第67回東医体ゴルフ競技が開催された。多くのプレッシャーの中、男子部は総合優勝の栄誉に輝き、また女子部も6位獲得と、好成績を収めた。

男子個人では平宙訓君（4年）が2位、川原蒼平君（3年）が6位入賞と力戦奮闘した。

「平宙訓君はエースとして圧倒的な内容で、慶應を優勝に導いた立役者。惜しくも個人総合優勝は逃すも、来年には彼の独壇場となるに違いない。プレッシャーの中求められた成績以上を残す彼は、とてもかっこよく写りました」

「川原蒼平君は初心者始めながら、3年生にして次期エースにまで大成長を遂げた。東医体前の彼の努力に勝る人は誰も居ないだろう。ゴルフ部史上歴代トップの成長率に違いない。今後は彼も常勝慶應を引っ張っていってくれるだろう」と主将の泉光太郎君（4年）は両君についてこのように語った。

灼熱酷寒ものかはと練習に励み、常勝慶應を体現する部員の活躍を今後も期待したい。

（4年　上野悟）

平宙訓君（右）

川原蒼平君（右）

ハンドボール部　2連覇

ハンドボールの東医体は8月5日から9日にかけて盛岡を舞台に開催された。前年度東医体で初優勝を飾った慶應は、2連覇を期待されながらその重圧をはねのけ、見事にその大一番でやってのけた。

東医体を通して特に目立っていたのが、上級生の活躍である。今大会MVPに輝いた秋野啓一郎君（6年）は試合の流れを左右する数々の局面でシュートを決め切り、流れを常に慶應のものとしていた。LB部門賞でベストセブンに選ばれた酒井隆玖君（5年）は、1対1からのフェイントや巧みなパス回しによりゴールへの道を切り開き、得点を量産した。PV部門賞でベストセブンに選ばれた岡田淳志君（5年）は、相手のエース格を完全に封印し、ピンチの芽を取り除いた。

盛岡という遠征の中でもチームメイトが5日間応援に駆け付け、インスタライブでも数多くの人が応援してくれるという、どのチームよりも強固な団結力を持ち、周囲からも愛された慶應だからこそ、東医体2連覇を達成できたのだと主将の宮田諒君（4年）も頷いた。今後のハンドボール部の躍進が非常に楽しみだ。

（5年　浅井隆徳）

部員全員で掴み取った東医体２連覇

ヨット部　準優勝

8月2日から4日にかけて、神奈川県の江の島ヨットハーバーにて、東医体ヨット競技の熱戦が繰り広げられた。ヨット競技では、各レース上位2艇で集計し、その総合順位を競う。昨年度、7年ぶりに悲願の団体戦優勝を果たしたヨット部は、「誰よりも正しく努力する」という戦略のもとレースに挑んだ。箱石晶世君（5年）・渡辺武君（1年）のペアが見事2位の好成績を残し、最終結果は総合準優勝となった。

主将の松尾昂朗君（5年）は、「今年の東医体はOBOGの先生方、家族、コーチの皆様に支えられて準優勝を果たすことが出来ました。しかし優勝できなかった悔しさも同時にあります。来年は必ず優勝を掴めるよう精進してまいります」と話す。今後のヨット部の活躍に期待したい。

（5年　伊庭知里）

熱戦を繰り広げる３艇

空手部　男子団体形優勝、総合準優勝

昨年女子総合優勝の空手部が、今年も健闘した。松田諒太君（4年）、田村全君（4年）、寺澤哲君（2年）の3人で挑んだ男子団体形では、優勝。新家寛太君（6年）、高野俊君（5年）を加えた5人で出場した男子団体組手でも、3位入賞となり、総合準優勝を果たした。その他、松田君は個人形でも決勝戦まで駒を進めた。また、団体形と組手の両方で活躍した寺澤君は2年生であり、将来有望な選手だという。女子では、大学から始めたとは思えない力強い組手を見せた森陽和君（4年）が、惜しくも準決勝で敗れたものの見事3位入賞となった。

主将の松田君は、今年の結果について「熱心に練習に励んでくれた部員の皆一人一人の頑張りのおかげです。女子は優勝杯を譲りわたす悔しい結果となりましたが、来年は必ず勝利してくれると信じています。努力を重ねた選手、応援してくれた部員、サポートしてくださった部長・監督の皆で掴んだ勝利です。支えてくださった方全員に感謝申し上げます」と語った。

（5年　伊庭知里）

優勝した男子団体形

弓道部　団体戦第3位、全医体へ

6人立、計96射と例年より少ない矢数で争われた今年の団体戦。普段と異なる状況の中、本塾弓道部は見事第3位を獲得した。

主将の高廣直希君（4年）は「昨年度優勝校として3位という結果はあまりに悔しいものでしたが、どうにか全医体出場権を獲得することができ良かったです」と語る。練習時の安定した的中が出ず、結果は計96射48中で弘前大学と3位タイ。全医体をかけた勝負の行方は団体競射へと委ねられた。最大級のプレッシャーの中、最後まで粘って中てきり、見事全医体への切符を勝ち取った。3位が決定した瞬間、選手の目には大粒の涙が浮かんだ。

また、高柳優太君（3年）は8射6中で個人戦準優勝、高松康介君（2年）は8射5中で第10位を獲得。団体が不調な中で的中を出しチームを支えた。高廣君は「現時点での実力を受け入れ、残り1ヶ月で全医体に自信を持って臨めるよう努力を続けます」と話す。

2年連続での出場となる全医体。東医体での経験を糧とし、弓道部が活躍してくれることに期待したい。

（2年　永田みのり）

的前で集中する団体選手

水泳部　男子準優勝

本年度の東医体水泳競技は8月3・4日、日環アリーナ栃木で開催された。「水の王者慶應」の名に恥じないように男子4連覇、女子入賞を目指して懸命に練習に取り組んできた水泳部。昨年から実力を伸ばすチームも多く厳しい戦いが続いたが、男子準優勝を手にした。

特に男子は、400mメドレーリレー2位、200mフリーリレー3位、800mフリーリレー2位のほか、個人でも鷲見祐介君（2年）が3種目でメダルを獲得し、牧野誠久君（2年）が200mバタフライ3位、由良弘二朗君（4年）が400m自由形3位など、多くの選手が活躍した。

今年の東医体について主将の由良君は、「多くの先輩方と現役の熱い応援も力に最後まで粘り抜くことができた。来年は一から力を付け直し、王者返り咲きを目指したい」と語る。

健闘するも優勝には至らなかった強豪・水泳部の今後の活躍に期待したい。

（5年　村田和勇樹）

男子総合準優勝

硬式庭球部　男子部東医体3位

8月2日から6日の4日間、山中湖東照館テニスコートにて、硬式庭球部の熱戦が繰り広げられた。昨年準優勝の男子部は、今年も3位獲得と見事な成績を残した。

昨年の東医体では、トーナメント形式の決勝戦にて、千葉大学に惜しくも敗れ、準優勝となり悔し涙を飲んだ。その宿敵・千葉大学とは4回戦で当たり、3―2で競り勝ったものの、翌日の準決勝で獨協医科大学に2―3で惜敗。筑波大学との3位決定戦では、3―0と圧倒的な力を見せつけ、見事3位を獲得した。女子部は、1回戦で東京慈恵会医科大学に3―0で勝利したものの、2回戦で東京医科歯科大学に1―2と惜しくも負けてしまった。主将の鳴戸雄謙君（5年）は、「東医体男女アベック優勝を目指して頑張っていきたいと思います」と来シーズンへの抱負を語った。

（5年　伊庭知里）

宿敵千葉医に接戦の末勝利した瞬間

表彰式の様子

各部の活躍ぶりを写真で紹介

バドミントン部
一羽入魂で全力を尽くしました！

卓球部
一球入魂！！

端艇部
悔しさを糧に。

競走部
お疲れ様！！

馬術部
閉会式後に部員全員で獲得した賞状と共に

軟式庭球部
一球入魂

女子バスケットボール部
５年ぶりに出場し、忘れられない東医体になりました！

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時、午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

公益財団法人武田科学振興財団
医学部博士課程奨学助成について

2024年度から、本学医学研究科は公益財団法人武田科学振興財団の医学部博士課程奨学助成の指定大学となりました。生命科学分野、特に疾病の予防・診断・治療の進歩・発展に貢献するため、医学部医学科出身の基礎医学研究を希望する博士課程の大学院生へ２年間に渡り年間360万の奨学金が支給されます（最長４年間）。

詳細は以下から確認いただけます。

https://www.med.keio.ac.jp/admissions/doctoral/fees.html

医学部医学科出身で本学医学研究科博士課程（基礎医学系）への入学希望者は本制度の応募をぜひご検討ください。

鑑賞知来

「臨床のセンスを磨いてきなさい」内科学教室（神経）中原仁教授から初期臨床研修開始の際に頂いた言葉を、事ある毎に思い返す。センスとは何か。情熱、努力、知識量、費やす時間を前提としても、必ずしもセンスの良さには結びつかないと、私は今までの経験から感じてきた。

ヴァイオリンを幼少期から弾き続けている。私の師匠が、理論的に説明しつつも「あとはセンスだから」と実演してくれた場面が脳裏によぎる。間の取り方、呼吸、運弓やヴィブラートの種類と速度など、分析できる要素はいくつもあるが、そのまま真似してもうまくいかない。師匠の音を一つの例とし、試行錯誤に戻る。自分で良いなと気づいた音楽の要素が伝わるよう心を配り、理想の音を探していく。

私の好きな哲学者千葉雅也氏の新刊の題名が丁度『センスの哲学』だ。ディテールがどうなっているか観察して言語化する練習をしていくことで、センスを後天的に育成できると説く。ミクロな視点で見ると、並ぶ要素には変化や緩急やうねりといった、千葉氏が呼ぶところの「リズム」があると気づけるようになる。

ある時絵画教室で林檎を模写した。林檎が置かれた台に反射する影には赤みがあるはずだ」と先生に指摘された。私は灰色の濃淡で影を描いていた。赤を重ね、さらに影の深みに少しの青を入れてみると、影に立体感が出た。細かく観察してはじめて気づける要素がある。全体からどの要素を良い・面白いと思って取り出し、どう並べるかがその人のセンスになる。

内科の後期臨床研修開始から4か月が経つ。臨床でも大枠の転帰だけでなく、日々大小様々な展開がある。細かい身体診察や検査データをよく観察して得られる所見のうち、何を有意とし、どう総合的にアセスメントするか。また諸先生方はそれぞれの展開にどう対処しているか。観察し、言語化することがセンスを磨く訓練になるのだろう。細部の観察にこそ何事にも通じる神髄がある。

（内科学教室（神経）　小林香音　101回）